

おはようございます

JAながの 志賀高原営農経済センター 営農課
やまぐち たいせい
営農技術員 山口 大成



当センターが誇る桃、ブドウ、リンゴなど、より高品質で出荷量を増やせる技術や対策の研究に励み、組合員の皆さまとともに地域ブランドの向上に努めています。経験も知識も生産農家の皆さまの方が豊富で、時には教えていただくこともあります。日々、やりがいを感じています。近年の気候変動による天候不良をはじめ想定外の被害が大切な生産物に襲いかかります。手を尽くし組合員や地域を守っていきたくと考えています。

健康 Q & A

足関節が変形

Q 若い頃からスポーツを熱心に行っていました。最近、右足関節(足首)の調子が悪くありません。歩行でも右足関節が痛くなってきました。かかりつけ医では、足関節が変形しているといわれましたが、どのような治療方法があるのでしょうか。(65歳、男性)

A 足関節の痛みにはさまざまな原因がありますが、その一つに変形性足関節症があります。加齢により徐々に発症することもあります。外傷が原因となることもあります。変形性足関節症では、足関節の軟骨がすり減り、炎症が起き変形を生じます。足関節装具などでの保存的加療が有効でない場合、手術による治療を検討します。

変形性足関節症に対する手術には、遠位脛骨骨切り術、人工関節置換術、関節固定術などがあります。関節固定術は、可動域が犠牲になるという欠点はあるものの、足関節症に対する手術の中で最も安定した成績が得られるとされています。

以前は大きく外側の皮膚を切開して行っていたが、近年では関節鏡を用いて小さな切開で手術が可能となりました。関節鏡を用いることで足関節周囲への侵襲を最小限にできるため骨癒合にも有利とされ、以前の手術に比べて回復が早いことが特徴です。

手術は足関節を構成する脛骨と距骨の関節面を削り、骨を合わせて金属のスクリューで固定します。足関節が固定されると、足首が動かなくなってしまう方が多いのですが、足関節以外の関節が動きを補ってくれるため、日常生活が大きく障害されることは少ないです。

ただし、関節鏡を用いた手術の適応外になることがあります。CTやMRIなどの検査をして検討します。

(JA長野厚生連長野松代総合病院
整形外科部長 望月正孝)

お知らせボード

★来春卒業生向け JA長野県グループ採用説明会

県内14のJAおよび連合会(JA長野中央会、長野県信連、JA全農長野、JA長野厚生連、JA共済連長野)、関係団体が構成するJA長野県グループは、来春(2026年)卒業生向けの採用説明会を団体ごとに順次開催しています。詳細は「いいJAん!信州 採用情報ページ」(右のQRコード)からご覧ください。



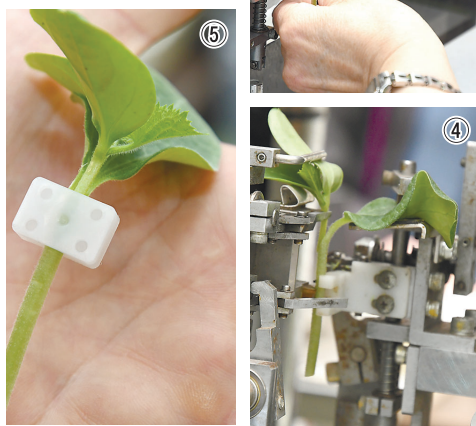
私たちの国で消費するたべものは、できるだけこの国で生産する。国産消費国産にJAグループは取り組んでいます。



食と農で地域に笑顔をつくります
組合員・地域とともに食と農を支える協同の力の発揮



▲接ぎ木機Ⅱ写真②。両側から穂木(キュウリ)と台木(カボチャ)をセットし写真③。中央で合体させⅡ写真④Ⅱクリップ止め。出来上がった接ぎ木苗(写真⑤は奥⑤)と不要になったそれぞれの茎葉同前は排出される。



センターの作業は、5月の連休明けのピークに向けて忙しさを増していきます。かつては1年間に200万本ほどの生産を記録した年もありましたが、農家数の減少もあって、近年は150万本ほどで推移しているそうです。農家出身で自家用育苗に苦労する父の姿を見てきたという北原センター長は「個々の農家の負担を減らし、高品質の信州野菜のもととなる苗を供給するのがセンターの役割。暖房費や各種資材が高騰する悩みは共通ですが、まこと生産することで安定供給を維持したい」と語っていました。

屋外での農作業が本格化するのを前に野菜など苗の育成がそれぞれの施設で進められています。苗の良しあしは農作物の出来を決める大きな要因。接ぎ木で作る場合もあるそうです。2月初め、今冬最強の寒波襲来を



野菜の品質 鍵握る苗

接ぎ木する機械は、キュウリの苗(穂木)を供給する側と、台木となるカボチャの苗を供給する側が対面する形で並んでいますⅡ写真②。準備した苗をそれぞれの側で作業者が機械にセットⅡ同③。180度回転して穂木と台木が対面したところで合体させⅡ同④、クリップで留めます。完成して出てきた接ぎ木苗Ⅱ同⑤Ⅱは手作業で、トレーに植え付けますⅡ同⑥。トレーにはあらかじめ培土を入れ、決められた深さの穴が開けられており、接ぎ木された苗の確認を瞬時に行って植え付けます。非常に高度な技術と経



養生室で管理し新たな根が張ったキュウリの接ぎ木苗。この後育苗ガラス温室に戻し出荷に向け順化、育成する



前に中川村のJA全農長野野菜種苗センター=写真①=を訪ねました。同センターは、主にキュウリやナス、トマトなど果菜類を中心に苗を育成、JAみなみ信州をはじめ県内外に各種の苗を供給して30年になります。



天竜川右岸、飯島町境に位置する同センターで北原秀樹センター長Ⅱ写真Ⅱが迎えてくれました。最初に見たのはセンターの主力となっているキュウリの機械による接ぎ木作業。国内では数カ所しか見られない作業と言います。苗をわざわざ接ぎ木で作るのは、収量を上げ、土壌伝染病や害虫を抑えるなどの目的があるそうです。

この接ぎ木方法は、台木の子葉を1枚残し、根も切り取られています。接ぎ木後、台木の茎から新たに根を発生させる生長根により、活力ある健全な苗になるのだそうです。

接ぎ木苗を植えたトレーは作業場の側面にずらりと並ぶ養生室へⅡ写真⑦。LED照明で温度、湿度、照射時間ともに管理された環境で6日ほどなじませてから育苗用のガラス温室へⅡ写真⑧。

この日はトマトなどナス科の接ぎ木作業もしていました。こちらは全て手作業。根を残した台木に、目指す作物の茎葉をつなげます。トレーからそれぞれの苗を切り取り、茎葉側の穂木を根の付いた台木の茎にチューブ状のクリップでつなげていきますⅡ写真⑨。

※ ※ 接ぎ木するには穂木、台木とも、それぞれの苗を用意しなければならず、センターで種を仕入れて育てます。種をまくには培地を入れたトレーを用意します。

最初に、決められた穴数のセルトレーに機械を使って、ピートモスと呼ばれる培地を詰めます。欧州から輸入している専用の園芸用土で、センターで使うほか、各JAからの注文を受けてまとめて購入しているそうです。

※ ※ 培地を詰めたトレーに、種をまく穴を開ける専用の機械もあります。決められた深さ、直径で穴を開け、種まきの準備完了Ⅱ写真⑩。種まきはキュウリなどウリ科では専用の機

械も使いますが、それ以外は手作業です。品目が混じらないよう細心の注意が必要です。接ぎ木作業と並行して種まき準備も続けていました。

種をまいたら穴を埋める覆土作業。その土も専用で、こちらは国産です。培地詰め機のベルトコンベアに続いて覆土機用のコンベアが設置されていました。種をまいたトレーを通すと、水まきと覆土を同時に行いますⅡ写真⑪。

